

73

キングス・コレッジ病院の創設と発展

柳澤 波香

青山学院大学／津田塾大学

キングス・コレッジ病院 (King's College Hospital) は、ロンドンのホルボーン地区ボルチュガル・ストリートにロンドン大学キングス・コレッジ医学校の教育病院として1840年に設立された。同地区は人口過密で疾病貧民も多く、病院はかつての救貧院を転用して開設された。キングス・コレッジは、同時期に非国教徒を対象として設立されたロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジに抗して創設され、その創設には国王、英国国教会、貴族が強大な支援を行なったため、医学校、病院においても王室との繋がり、英国国教会の伝統、精神が尊重された。

キングス・コレッジ病院設立の中心となったのは内科医トッド (Robert Bentley Todd, 1809–1860) である。トッドはダブリンのトリニティ・コレッジで医学を修め、ロンドンに移り、キングス・コレッジ医学校で病理解剖学および生理学を教えた。トッドは医学の知識、技術面のみならず社会的にも尊敬される優れた人格、高い品性を持つ医師を育成することを重視し、そのためには英国国教を精神的支柱とした教育が不可欠であると考えた。講義では出席をとり、全寮制を導入した。患者への最良のケアを提供することが病院の務めと確信したトッドは病院看護に関する改革も行った。英国国教の精神に基づくイングランド初の看護婦養成学校 St John's House の設立に参画し、キングス・コレッジ病院の看護は1850年代以降、メアリ・ジョーンズ (Mary Jones, 1812–1887) を中心とした St John's House のスタッフにより担われた。

外科においては、エディンバラで医術を修めたファーガスン (William Fergusson, 1808–1877) が病院の創設時より外科医師を務め、外科学教授として学生の指導に当たった。ファーガスンはヴィクトリア女王の侍医であり開業医としても多忙を極めたが、教え子の顔と名前を正確に記憶しており、System of Practical Surgery などのテキストを著した。ポーマン囊にその名を留める外科医ポーマン (William Bowman, 1816–1892) は創設期からキングス・コレッジ病院医師を25年間務めた。ポーマンは優れた眼科医でもあり、キングスを辞した後にムーアフィールドズ眼科病院へ移り、英国眼科学会の設立に貢献した。1877年、ファーガスンの後継としてリスター (Joseph Lister, 1827–1912) がキングス・コレッジ病院、医学校に着任した。リスターは非国教徒でライバル校のユニヴァーシティ・コレッジの卒業生であり (後に英国国教に改宗)、当初は石炭酸消毒法に対する抵抗感、疑念を抱く病院医師が少なくなかったため、リスターの教授就任には難しい局面もあったが、有能な弟子と共に消毒法を確立させ、キングス・コレッジ病院における外科手術成績の向上に多大な貢献をなした。

19世紀末、キングス・コレッジ病院は創設地ホルボーンからロンドン南部のデンマーク・ヒルへ移転した。この一帯は人口が急増し、貧困層も多かったが、拠点病院のない地域であった。12エーカーの病院用地は、新聞および文具販売商として財を成した W H Smith 家の寄付によるものであり、病院建設費用は多方面からの寄付金により賄われた。国王エドワード7世が礎石を据えた新病院は1913年に開院した。

キングス・コレッジ病院は、創設時には他のロンドンの病院に比して小規模であったが、20世紀以降、糖尿病、肝臓疾患、心疾患、小児医療、移植医療等の領域において先駆的治療を行い、ロンドン南東部の地域医療の拠点病院であると共に、英国有数の教育病院、高度先進医療・研究の拠点病院のひとつとなった。病院は2006年に King's College Hospital NHS Foundation Trust となり、現在の病床数は1300床を超える。